

声を失った少女（リメイク版）

キルレイ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少女は物語に存在してはいけない。

感情を捨て、声を捨てた少女は。

虐待と拷問を受けていた少女は。

ホンモノであろうとする少女は。

物語に関与することを許されない。

この作品は「声を失った少女」のリメイク作品です。

理由付けや設定が変わっています。

5話
4話
3話
2話
1話

--	--	--	--	--

47 36 25 11 1

目次

1話

眠りから覚めると、血が染み付いている木の床が視界に入りました。少し遠くには、金属でできた色々な道具があります。

寝起きということもあり、つい上体を起こそうとしてしまいましたが、足元でフェリユさんが作業をしていることに気付き、すぐさま動きそうになった体の一部、何から何まで全てを静止させました。

「うーん……悩むなー……」

フェリユさんは鋭利な刃物を、血でべつとりになっている左手で回しながらそう呟きます。

きつと私に、どのような傷をつけるのか悩んでいるのでしょうか。

「んー、思いつかないことだし……レイラ——って、起きてたんだ。早速だけどあれ、やってくれる？」

私は言葉で返事をせずに、行動で返事をしました。手足に繋がれている鎖の擦れる音を立てながら立ち上がり、近くに置いてあった刃物に気をつけ、膝を抱えて座ります。

「ありがと、そのままじつとしててくれ」

そう言って、あれだけ手が動いていなかったフェリユさんが打って変わって、手際よく私の腕や足に新しい切り傷を作っています。

そして数分後――。

「よし、完成つと！ いやあー、まさにイメージ通りだよ。似合ってる似合ってる！」
完成：ですか？ いつもは爪を剥がしたり、骨を折ったり、皮膚を焼いたり、痣を作ったりを組み合わせているのに、今回は切り傷だけですよ？

それらの疑問が顔に出ているからか、それともただの独り言なのか、フェリユさんは嬉々として答えます。

「数日前だったかな？ 一種類だけの傷ならどうなるんだろう、つてある日突然思いついてさー。にしても予想以上だよ！ やっぱレイラは僕が見込んだだけのことはあるね」

それからフェリユさんの話は続き、一時間ほど経つと用事があるとのことこの部屋から出て行きました。

私は疲労感が少しあったので、床の上に倒れて寝ることにしました。

次に目覚めた時、濃い茶色の天井が私の瞳に映りました。

寝ぼけているだけかと思いましたが、何回もパチクリとまばたきをしたので見間違え

ではありません。知らない天井です。

私はここがどこなのか気になったので、周りを見ようと起き上がります。

広さは私がこの前まで居た部屋と同じぐらいで、ベッドは私が使っているもの以外は
ありません。周りには椅子が一つ置いてあります。

体には数箇所白い布が巻かれていて、鎖があつたはずの所には何も縛られていま
せん。

結局、私にはここがどこなのか見当がつきませんでした。分かることといえば、私を
ここに移動させた人はフェリユさんではないことくらいです。

これ以上考えていても何も思いつきそうにありませんね。まだ疲れが残っているこ
とですし、起きていても何もすることがありません。もうひと寝入りするとしてしまし
よう。

私は寝る姿勢に入ろうとしましたが、ドアを軽く叩く音がしたのでそのまま起きるこ
とにしました。

ドア越しから「入るよ」と言つて入つてきたのは白い服を着た男の人でした。見覚え
はありません。

男の人は椅子に座りながら、私に話しかけてきます。

「目が覚めたみたいだね。なかなか起きないものだから心配していたよ」

この人の穏やかな口調と優しさを感じる声色は、あの人と似たものを感じました。久しぶりにその顔がふと頭の中をよぎります。まあ、昔の記憶なのでかなりうろ覚えですが。

男の人は続けて言います。

「起きたばかりで戸惑っていると思うが、まずは安心してほしい。ここには君に酷いことをする人はいないよ」

酷いことというのは、例えばどういったことなのでしょう。あまりに曖昧で分かりません。

でもまあ、きつとこの人にとっては私に安心してもらえればそれでよいのでしょうか。

私は理解したということを相手に伝えるため、頷きます。

「コクッ」

「分かってくれたかい？　ではまず、ここがどういう場所なのか、どうして君がここにいるのか、順を追って説明しよう」

この人が言うには、私が住んでいた家の貴族が大きな罪を犯したそうで、家族全員皆殺しにするため憲兵がその貴族の家を襲撃。その際、監禁されていた私を発見し、この病院に連れてきたそうです。

この病院は奴隷となっている子を助けるための施設で、誰かが引き取ってくれるまで

面倒を見るらしく、今回私の担当になったのがこの男の人とのこと。

「——君は重傷だったため、医者である私に担当を任せられたんだ。何か質問はあるかな？」

今話してもらった事とは関係の無い質問ですが、手足に巻いてあるこの白い布が気になります。

私は布を医者の人に見せるようにして、手を前に出します。

「……？ あ、それは包帯といって、傷口を保護するんだ」

最初は意味が分からなかったみたいですが、伝わったようです。

これは包帯というんですか。傷口を保護するために付けているのであれば、私には必要ありませんね。だってもう、治っているでしょうから。

私は包帯を取って傷一つない腕を確認します。

「なっ——!?!」

すると、医者の人が乱暴に立ち上がり、現実を疑っているかのように私の腕を凝視します。そこまでびっくりすることなのでしょうか？

「……さ、触ってもいいかな？」

「コクッ」

医者の方は恐る恐る私の腕を、傷があつたであろう場所に手を当てています。

「ほ、本当に治っている…。信じられない…」

怪我が早く治ることは自覚していましたが、まさかここまで驚かれるとは思いませんでした。私の方が驚きです。

医者の人からはこのことを他言しないよう促されました。別に隠すほどのことではないと思うのですが、ここは素直に従いましょう。

そのあとはこの施設での決まり事を教えられ、改めて自己紹介をされました。

「———そういえば、まだ聞いていなかったね。君には名前はあるのかな？」

「コクッ

」ではその名前を教えてほしい」

そう言われても、私には名前を伝える方法が分かりません。どうすればいいのでしょうか。手で喉を当てても分かりにくいですし…あ、声を出したら分かってくれるかもしれません。

「

」 声が出ない私の口からは、空っぽの音だけが発せられました。

数日後——。

今日は久しぶりに外に出掛けます。医者の人と初めてのお散歩です。

部屋でお昼ご飯を食べながら医者の人から注意事項を聞き、外出用の服に着替えて玄関の前まで来ました。

「もう一度言う確認するけど、私と手を離さないこと。興味が出るものがあつたら指をさして教えること。気分が悪くなつたらすぐに私の服を掴むこと。いいね？」

「コクッ

「よし、じゃあ行こうか」

医者の方は玄関のドアを開きます。

そこには、石で敷き詰められた道路の上を、大人から子供までもが歩き回っています。あちこちには赤い屋根と白いレンガの家が建てられていて、太陽の光で照らされている明るい街並みという印象を受けます。

私は医者の方の手を握り、病院から出ました。

すぐく、すぐくすぐく眩しいです。全身で陽の光を浴びると、こんなにも目が眩むもののですか。予想外です。

それから数十分、医者の方に付いて行かれるがまま歩きます。

次第に太陽の眩しさには慣れてきましたが、街の明るさには慣れませんでした。

通りがかる人々は表情を豊かにして喋り、怪我をしている者はほとんど居らず、どこを見ても犯罪が行われていない。

そんなこの街を、私は慣れることができませんでした。

「さて、もう疲れてきた頃だろう。そろそろ帰るかい？」

疲れている訳ではありませんが、特にこれといって何もありませんし……そうですね。もう帰りましょうか。

そう思い領こうとすると、

パカラツパカラツ

と、知らない音が聴こえてきました。耳を澄ませてみると、その音が大量に重なっていることが分かります。

音がする方向を見ると、人だかりができていました。なぜ人が集まっているのでしょうか。私は気になったので、そちらに指をさします。

「……あそこに行きたいのかい？」

医者の方は気が進まないような顔をしています。なおさら私は何かがあるのか気になりました。

「コクツ

「……分かった、怖くなったら私の後ろ来るんだよ」

そして、私は医者の方と離れないように手を掴み、人ごみを掻き分けて一番前の列にたどり着きました。そこで見たのは――

茶色い動物を引き連れ、血塗れになつて歩を進める調査兵団の姿でした。誰しもが負傷していて、誰しもが絶望した顔をしています。

医者の人から壁の外には人を食べる巨人がいると聞かされてはいましたが、まさか兵士がここまでボロボロになるとは…。それほどまでに巨人が強いということですね。

それはさておき、さっきの音はあの茶色い動物の足音でしょうか。なんとという名前の動物なのでしょう。それに向かつて指をさします。

「この人達は調査兵といつてね、巨人の謎を解くために壁外に行くんだ。この有様を見るに、今帰つてきたみたいだね」

いえ、そのことを聞いているわけじゃありません。そんなこと見れば分かります。

私は首を振り、もう一度茶色い動物を指します。

「フリフリ

「ん？ あ、ああ…あの頭のことか…。あれには振れないであげよう。何十人もの死体を見てしまえばああもなるさ。だから——」

違います。ハゲた人はどうでもいいです。私が気になつているのはあの動物なんです。

「フリフリ

「そうじゃない？ だとすると…なるほど。あの人の濃ゆくて太い眉毛が面白いって話

だね。しかもそれに対しての目の細さが……。もうこれは凄いとしか言い様がない」

違います。違うんですけど何ですかそれ、すごく気になります。そんな人見たことありません。

動物より興味の湧いたその人を見つけるため、医者の方の視線を追って調査兵団の人の顔を一人一人観察します。

しかしなかなか見つかりません。本当にそんな人がいるのでしょうか。そんなことを考えつつ黙々と探していると、一人の兵士と目が合いました。

他の男性よりも少し小柄で、目も眉毛も細く鋭い目付きをしています。この人でもなさそうです。私は隣の人の顔を見ようと思いました。

「おい、お前……」

ですがその目を合した兵士から声を掛けられ、再度男の人と顔を見合わせます。

その人は何故か、わざわざ私に近づき足を止め、目を見開いて信じられないものを見るかのような表情をしていました。

「もしかして……」

男の人は過去の記憶から絞り込むように、

「レ、レイ……ラ……なのか？」

私の名前を口に出しました。

2 話

「俺は厩舎に馬を停めてくる。少し待ってろ」

私に続き、馬から降りたりヴァイさんはそう言つて、馬を連れていってしまいました。私は待つている間、目の前にある大きな建物を眺めることにします。

ここは調査兵団となった兵士達が体を鍛え、傷を癒し、食事を取り、寝泊まりする場所であり。

今日から私が住む場所でもある、調査兵団本部です。

—————

「さ、この子を知ってるんですか!？」

珍しく医者の方が取り乱しています。大きな声を出したせいで、人の注目を集めてしまいました。

「いや…そいつの外見が似た奴と一回話したことがあるだけだが…」

それを聞いた医者の方は、啞然として私に問いかけます。

「君は…君の名前はレイラ…なのかい？」

「コクッ」

「本当だったのか…。レイラさん、君はこの人に見覚えはあるかい？」

私は男の人をもう一度じっくりと見ながら、過去に会ってきた人の顔を照らし合わせます。覚えているかぎりの全ての人を思い出しました。

しかし…やはりというべきでしょうか。それらしい顔が見当たりません。あつたとしても恐らくは数年前の記憶、ぼやけているものがほとんどです。

それに男の人が言うには会っているのは一回だけ。逆に覚えている方が変ですね。

「フリフリ」

「見覚えはない…か」

「おい、あんた」

私と医者の人のお話が終わったのを見計らったように、男の人が会話に入ってきてきました。

「レイラとはどういう関係なんだ？」

「私は近くにある孤児院に勤めている者で、レイラさんを引き取る方が見つかるまで保護者代わりをしています」

「……」

その説明を受けた男の人は、真剣に考えている素振りをみせています。何を考えているのでしょうか。

「リヴァイ、どうしたんだ？」

そこへ馬に乗っている、金髪の背の高い男の人が来ました。小柄な男の人をリヴァイと呼んでいます。この人はリヴァイさんというのですか。

「エルヴィンか、好都合だな。頼みたいことがある」

そして大柄な方がエルヴィンさんですね。

頼みたいことというのは、先ほどまで考えていたことと何か関係があるのででしょうか。

「お前が頼みたいことだと？」

「こいつは孤児らしくてな、引き取る相手を探しているらしい。そこで調査兵団の兵舎で住ませたい」

「……………は？」

……………へ？

「リ、リヴァイ…？ さすがにそれは」

「誤解すんなよ。あくまで暮らさせてやるだけだ。入団はさせねえ」

「その事ではないのだが…いや、何も言わないでおくか…」

エルヴィンさんから若干のためらいを感じます。何か言いにくそうです。

「で、どうなんだ？」

「私は構わないが…その子の意思はどうなんだ？」

私はどちらでもいいです。リヴァイさんが暮らしてほしいのならそうしましょう。

「コクツ

行きたいという意味での肯定。そのつもりでコクツとしましたが、伝わっているでしょうか。顔色を伺ってみます。

これはダメみたいです。リヴァイさんとエルヴィンさん、二人とも首をかしげてはてなマークを頭の上に浮かせています。

「まだ言っていないんですけど、レイラさんは声が出ないんです」

医者の方のフォローにより、二人のはてなマークは崩れ去りました。納得したようです。

「レイラさん、行きたいと思つての頷きで合ってるかい？」

「コクツ

医者の方のおかげでちゃんと伝わったようです。その証拠に、エルヴィンさんとリヴァイさんは私を調査兵団に連れていく方針で話を進めています。

「分かった。キース団長には私が交渉しよう」

「じゃあ決まりだな。俺はリヴァアイだ。レイラ、馬に乗せてやる。こっちに来い」

それは馬という名前だったんですか。そもそもその茶色い動物に関心があつて最前列に来たんですね。すっかり忘れてました。

私は医者の方の手を離し、リヴァアイさんが引いている馬に駆け寄ります。

するとリヴァアイさんが私の脇に手を入れて持ち上げ、言っていた通り私を馬の上に乗せました。その後リヴァアイさんも私の後ろに乗ります。

「進むぞ。落ちねえように気を付けろよ」

「コクッ

馬の上から見た景色は、いつもより視線が高いせいか全然違いました。貴重な体験なので、私は前後左右ココロココロと視点を変えます。

そんなことをしていると、一瞬エルヴィンさんと医者の方が話しているところを見かけました。

—————

「——でさー。あの子可愛かったなー！ 捕獲したかったなー！」

「……」

ぼーっとしながら兵舎を眺めていると、騒がしい声が聞こえてきました。そちらの方
向を向くと、リヴァアイさんとその横にメガネをかけて髪を結んでいる女の人がいます。
リヴァアイさんは女の人の話を無視していました。

「ねえーちよつと聞いている？　つてあれ、あんな所に何で女の子が…。リヴァアイはなん
か知って——！　リヴァアイがいなく——いたー！」

「待たせたな」

「なにになに？　リヴァアイとどんな関係なの？」

女の人は私とリヴァアイさんの顔を交互に見ながら、リヴァアイさんに説明を要求してま
す。ついでに私もその女の人について説明を要求したいです。

「こいつはレイラ。孤児らしいから引き取ることにした。声が出ないそうだ。レイラ、
こっちはハンジ。巨人好きの変わった奴だ」

ハンジさんですか。好きなものが巨人とは、確かに少し変わってます。

「え…リヴァアイあんた…」

ハンジさんの表情が一転して、リヴァアイさんをドン引きするような目で見ています。

「私のこと奇行種だの何だの言ってたくせに…。そんな趣味があつただなんて…」

「あ？　何言ってるんだ？」

ハンジさんが言っていることはどういう意味ですか？　という質問をしようにも、リ

ヴァアイさんにも答えられないようです。

「えーと、うん。レイラの容姿は可愛いからね。気持ちは分からなくはないけど…。いや、好みは人それぞれって言うしね」

「チツ…問い詰めてえところだが、飯の時間だ。後で部屋に出向くから、それまでに言葉を考えてろ。行くぞレイラ」

リヴァアイさんが兵舎に向かつて歩き始めました。私はリヴァアイさんの斜め後ろからついて行きます。

途中途中で怪我をしている人がチラホラと目に付きました。大事な人を失ったのか、涙を流している人もいます。

そういえばリヴァアイさんやエルヴィンさんは怪我を負った箇所がありませんね。巨人からただひたすら逃げていたのか、それとも並の兵士以上に強いということでしょうか。

「ここが食堂だ」

中是不思議なことに、机が多い割に人数が少なめでした。ここにいない人は、今日の壁外調査で受けた傷を治しているのでしょうか。

「飯を取ってくるから適当に座っててくれ」

リヴァアイさんは奥の方へと歩いて行きました。

私は人がいない机で、且つすぐ近くにあった席に座ります。身長が低いからか、机が少し高く足が床につきません。食事を食べる時に不便になりそうです。

そんなことを思いつつ待っていると、リヴァイさんがお盆を持って私の隣の席に腰掛けます。

「俺の分を分ける。これくらいでどうだ?」

リヴァイさんの手には半分より小さめにちぎられたパンが握られていました。

はい、これくらいがちょうどいいです。という意味合いを込め、私は頷いてパンを受け取り口の中に入れます。

病院での食事と同じく、味はなくて少し固めでした。少しずつ食べていると、

「リヴァイ、その子が今日からここに暮らすことになったという子供か?」

いつの間にか前の席に男の人が居ました。エルヴァインさんより背が高く、あごにひげを生やしています。

「ああ、名前は——」

「レイラだろう? ハンジから聞いた」

「そうか」

「それと、これもハンジから聞いた話なんだが…」

『ミケ…実はとんでもない秘密を知ってしまったんだ…。私はこれからどうすればいい

ものか……。リヴァアイは……ロリコンだったんだ!」

途端に、リヴァアイさんから静かな殺気が放たれます。

ろりこんというのは、そんなに言われたくない単語なのでしょうか。

「……あの野郎、そういうことか」

「念のため聞いておくが、決してそういう気持ちで引き取ったわけじゃないんだよな」

「当たり前だ。レイラ、食い終わったらミケにハンジの部屋まで案内してもらえ」

怒りを抑えているような声を発し、リヴァアイさんは食堂から出ました。

それから私はパンをちまちまと食べていました。男の人——ミケさんは無言で私を見ってきます。

沈黙の中、ミケさんは私にこんな質問をしました。

「レイラはリヴァアイと知り合いなのか?」

知り合いではないですね。リヴァアイさんが一方的に知っているだけですし、記憶違いの可能性も捨てきれませんから。

「フリフリ」

「そうだったのか? あのリヴァアイが赤の他人を助けるとは……意外だな」

……助ける? ミケさんは助けると言ったのですか?

私は今、リヴァアイさんに助けられている……?

ここに住ませせる行為は、私を助けることにある？

なぜ？ なんで？ どうして？ どうやって？ 何をして？ ワタシをタスける？

嫌だ イヤだ？ 怖い コワイ？ 違う そうじゃない そんなこと思つてない

私は本物 違う 違う チガウ チガウ… チガウ…？

ワタシは ニセモノ なの？

……。

ダイジヨウブ 誰も私を助けられない

ダイじよウブ 誰も私を助けられない

だいじようぶ 誰も私を助けられない

誰も私を、助けることなんてできない

大丈夫 大丈夫、大丈夫。

私が本物を見ることは無い。

違った。もう一つの本物だ。

だつて私は偽物じゃない。私は偽物じゃないです。

私は偽物なんかじゃないんです。一つの本物です。

だから私以外の本物は、私には知らなくていいことなんです。

私の本物は、間違つてなどいけませんから。

間違つてなんか、ないんです。

「おい…大丈夫か？ 手が止まつてるぞ。もう食べきれないのか？」

ミケさんに心配を掛けてしまったようですね。私は大丈夫です。

ここで頷いてしまえば、パンが食べきれないという解釈をされるのですが、まあいいでしょう。残りもあまりありませんし。

「コクッ

「じゃあ行くか」

その後、ミケさんには食器を片付けてもらい、ハンジさんの部屋まで先導してもらいました。ミケさんはノックをして、扉を開けます。

「やれやれ…」

ミケさんは呆れたように言いながら入っていきます。私もミケさんに続いて入りま

した。

「そこでは——」

「遅かったじゃねえか」

「ミケ！ 早くリヴァイを説得して、止めさせてくれええ！ 痛い！ 腕痛い！ マジ

で痛いんだって！　ぎやああああ!!」

這いつくばっているハンジさんの上に、リヴアイさんがハンジさんの腕の関節を変な方向へ曲げていました。

「それくらいにしておいたらどうだ。ハンジも反省してることだろう」

「してます！　反省してます！　ミケ以外には誰にも言わないから、誰にも言っていないから!!」

「……チツ」

リヴアイさんは渋々関節技を解き、ハンジさんの上から体を引きました。

ハンジさんはよろけながらも立ち上がり、腕を抱えて涙声を上げます。

「うう……痛い……。あれ？　今更だけど何でミケとレイラが私の部屋に？」

「俺が呼んだ。ここをレイラの寝床にしようと思ってな」

「そゆことね。私は全然いいよー、一緒に寝たいって思ってたし。レイラもそれでいいよね？」

いいですよ。特に反対する理由はありません。

「コクツ」

「やったー!」

やけにハンジさんは喜んでいます。そんなに嬉しいことなのでしょうか。

「あ、ミケ。それとリヴァイも。明日用事とかある？」

「俺は今日の壁外調査の事後処理がある」

「俺は何もねえが…なんだ？ どっか行くのか？」

「うん。レイラの服でも買に行こうかなーって思ってた。レイラは来る？」

服のことはどうでもいいのですが、今後暇になることが多くなると思うので、何か退屈のぎになる物が欲しいです。

服屋さんの周りにそういう物が置いてあるお店があるかもしれませんね。私も行きましょう。

「コクツ

「よっしや！ リヴァイは？」

「特にすることもねえからな、俺も行こう」

「了解！ 明日は三人で外出だー！ それじゃ、明日のためにもレイラは寝よつか。もう夜遅いし、疲れてると思うから」

言われてみれば、少し疲れているかもしれませんね。ここはハンジさんの言葉に甘え、寝させてもらいましょう。

「私も後で寝るから、先にそのベッドで寝てていいよ」

「コクツ

私はベッドに横たわり、薄い毛布にくるまりました。まぶたを閉じて、意識が遠くなるのを待ちます。

「ところでリヴァイ、なぜレイラを引き取ったんだ？」

「あーそれ私も気になる」

「ああ…そうだな…。正直俺にもよく分からんが…恐らくレイラに——」

そこから先の内容は、眠りに入った私には聞こえませんでした。

3 話

「ありがとう、お姉ちゃん」

妹は笑顔でそう言った。

—————

久しぶりに：夢を見ました。どんな内容だったのかは忘れてしまいましたが、懐かしい夢だった気がします。

もう少し寝たいところですが、疲れが取れきれたおかげか、完全に目が覚めてしまいました。眠れそうにありませんね。起きましよう。

私は隣で寝ているハンジさんを起こさないようにベッドから出て、窓から外の風景を見ます。

日の出はまだ出ておらず、まだほんのり暗めでした。起床時間にしては早すぎましたね。

何もやることはありませんし、空でも観察しましょう。

数分で飽きました。他のことをしたいです。

しかしそうは思うものの、何をしましょうか。何かないものかと探そうにも、それは触つていい物なのか区別できませんし、何より無断で漁るわけにはいきません。

うーん：試しに食堂にでも行ってみましょうか、歩くだけでも時間は潰れますし。

そうです。歩くだけでいいならせつかくの機会、この兵舎の間取りを調べましょう。ここに住む以上、最低限度ハンジさんの部屋、食堂、玄関には迷わず行けるようにしなければ。

私は早速廊下に出て、ほつき歩きます。

ふむふむ、だいたいの部屋を把握することができました。さすがに室内まではチェックしていないので誰の個室かまでは分かりませんが、構造は確認できたので迷うことはないでしょう。

さて、そろそろハンジさんの部屋に戻るとしま——

「レイラーー!! おーい!!」

背後から聞き覚えのある女の人の声が聞こえてきました。

振り向いて目を凝らしてみると、ハンジさんが手を口に当てて叫んでいます。

ハンジさんも私に気付いたようで、私のところに駆け足で近づきます。

「あー！ ここに居たんだ、良かった…。びっくりしたよ、レイラがいなくなってたんだから。もー不安で不安で…」

そう…だったんですか。すみません…昨日と今日とで、心配を掛けてばかりですね。

ハンジさんは人差し指を立てながら私に注意します。

「いい？ 今度からは一人で勝手に行動しないこと。分かった？」

「コクッ

はい、次からは気を付けます。

「よし、反省しているみたいだし、朝ご飯を食べに行こうか」

「コクッ

そしてハンジさんと食堂に行き、ばったり会ったりヴァイさんと朝食を取ることにになりました。

室内は以前より人が増えているせいか、多くの視線を浴びます。

ですが私含めて三人、気にせず食事しながら外出について話し合っていました。

「行き先としてはシガンシナ区か近場だけど、せっかくだしシガンシナ区でいいよね？」

「ああ」

「あそこ徒歩で一時間くらいだっだと思うし、これ食べ終わったらすぐ行くっか」

「そうだな」

「具体的な所は着いたら決める？」

「ああ」

「私金持つてく予定だけど、リヴァイは持つてく？」

「ああ」

「あとは——」

これは話し合いというより、ハンジさんの提案をリヴァイさんが承諾しているだけですね。最後までリヴァイさんは「ああ」とか「そうだな」しか言つてませんし。

そんなこんなで三十分後。私服姿に着替えた私達は、シガンシナ区を目指して出発しました。

シガンシナ区。ここはもともと外側の壁であるウォールマリアの南側に突き出した街。

家が建ち並び、人通りはとても賑わっています。

行きがけで薄々気付いてはいましたが、ここは前まで住んでいた病院があり、またリヴァイさんと初めて会つた場所みたいです。

私ははぐれないようにするためハンジさんと手を繋ぐことになりました。リヴァイ

さんは後ろから付いてきています。

服屋さんを探し回ること十五分、未だに見つけられずにいました。

「見つからないねー。ちよつと誰かに聞いてくるから、リヴァイとレイラはここで休んでて」

そう言うとハンジさんは片っ端から聞き込みを始めます。一人ずつ声を掛けては別の人にと切り替えていて、なかなか見つけられない様子でした。

この街は食べ物に関するお店は多いようですが、生活用品の方はあまりないようですね。私の目的としている物は見つかるでしょうか。

「おい、そのベンチで休むぞ」

リヴァイさんが私に目配せでベンチの位置を伝え、そちらの方向へと歩き出します。私も少し遅れて歩きました。

リヴァイさんの隣に座り、無言になること数十秒後。リヴァイさんが私にある問いをかけます。

「楽しいか？」

楽しいか…ですか。愚問ですね。そんなの、決まってるじゃないですか。

楽しくありませんよ。

そんな感情、一ミリも湧きません。

だってそれらを感じないように、昔捨てたのですから。

私はその問いに対し、楽しくないと首を振ろうとしました。しかし――

「リヴァアイー！ レイラー！ 見つけたよー！ こっちだつてー！」

タイミング悪くハンジさんの声が割り込んできました。

私はとっさにハンジさんの方を見ます。ハンジさんは私とリヴァアイさんが元いた場所から大声で手を振っていました。

リヴァアイさんもそれを見たのか、ベンチから立ち上がります。

「さっきの質問は無かったことにしてくれ」

？ 理由はよく分かりませんが、リヴァアイさんがそう言うのなら無かったことにしましょう。

私が頷き返した後、私達はハンジさんと教えてもらったという服屋さんに行きました。

屋内はそこそこの棚が積み重なっていて、その中に服が入っていました。全部でざつと三十着といったところでしょうか。

「レイラは何か着たいものとかある？」

「フリフリ

ないですね。なんでもいいです。」

「そう？　じゃあ私選んでくるから、適当にうろついてて。外には出ないでね」

「コクッ」

ハンジさんは私に釘を刺した後、熱心に服を選び始めました。

その間私は窓を通して外を眺めます。空よりかは飽きませんね。

理由としてはコロコロと光景が変わるのと、この街の明るさに慣れてないからでしょう。

ずっと前に暮らしていた所と雲泥の差がありますからね。慣れるにはまだまだ時間がかかりそうです。

「……暇か？」

そんなことを考えていると、リヴァイさんから話しかけられました。

あまりに唐突だったので、返事をするのに少し間が空いてしまいます。

「コクッ」

「さつき近くで店を見つけた。お前も来るか？」

何のお店かは不明ですが、そこなら何か見つかるかもしれないですね。行きたいです。

私はリヴァイさんにそのことを伝え、ハンジさんには他のお店に行くこと知らせました。私とリヴァイさんだけで移動します。

「……だ」

内部は服屋さんと似たりよったりですね。ただ置いてあるのはほうきや雑巾などの掃除道具です。ここは掃除用具専門店、といったところでしょうか。

リヴァアイさんはすぐそばにあるハタキを手に取り、興味深そうに見ています。しかもほんのりですが表情が緩んでいました。

私もリヴァアイさんを真似てハタキを持って見てみます。

木の棒の先端に布が付いてますね。

……。

それ以外の感想が思いつきません。というか、そもそも私は掃除をしたことがないので、使いやすいのかどうかも分かりません。

私はハタキを元の場所に返し、お店の中を探索することにしました。探索というより、ただ掃除道具を観覧しているだけですけど。

これはほうき。こっちはちりとり。雑巾、ハタキ、ブラシ——えっと……この四角くて白くて固いのは確か……石鹼でしたっけ？ よくフェリユさんがこびりついてた血を落とすのに使っていました。

……もういつそのこと掃除を暇潰しにやってもいいんですけど、綺麗にしてから汚れるまで合間ができてちやうんですよね……。

理想としてはいつでも好きな時にやれて、長期的にできて、ある程度一人でできる物

なのですが…：そう都合のいい物は見つからないものですね。

まあ、掃除用具専門店にそんな物を求めるのもどうかと思いますが。

ん…：あれは…。

ふと目に付いたそれは、文字が記されている紙を束ねてある書物——本でした。

字は少ししか読めませんが、教えてもらえれば一人で読めますね。それに読み返せば永久に読むこともできます。厚ければ厚いほど長続きすることでしょう——決まりです。これにします。

私は一番分厚いであろう本を取ろうとしますが、高い位置に棚があるせいでギリギリのところまで届きませんでした。

あと少しで届くのに…：一体どうすれば…。

「どうした？」

そう困っていると、たまたま見かけたのかりヴァイさんが来てくれました。

リヴァイさんは私が取ろうとしている本に視線を移します。

「あれが欲しいのか？」

「コクッ

俺がやる」

本当ですか？　ありがとうございます。

私はやや後ろに下がり、心なしか嬉しそうにリヴァアイさんは本を取ってくれました。リヴァアイさんは私に本を渡しながら言います。

「字は読めるのか？」

読めるといってもほんの一部分だけなので、ここは否定しておきましょう。

「フリフリ

「なら帰ったら俺が教えてやる。そろそろハンジも終わつてるところだろう。それ買って帰るぞ」

「コクッ

リヴァアイさんに本を買ってもらい、掃除用具専門店から出て服屋さんに行く途中、ハンジさんと合流しました。

「おー二人共。ちようどこつちも買い物が済んだところだよ——つてあれ？ リヴァアイ、それどしたの？」

ハンジさんは私が抱えている本に指をさして、リヴァアイさんに尋ねます。

「レイラが欲しがってたから買ってやった」

「へーそうな——リヴァアイ、私の目にはその本のタイトルが『初級から上級までの掃除テクニク』と映っているのだけれど。ついでにすごい分厚いんだけど。いくら潔癖症だからって押し付けはどうかと思う」

「誤解だ、レイラが欲しがってたって言ったろ。何回言わせる気だ」

「本当はリヴァイがそのかしたんじやないの？」

「そそのかしてねえよ。ってかそもそも会ったことある奴ら全員に対して巨人の話題を出すお前に、そんなこと言われる筋合いはねえな」

「そ、そんなことないし！ レイラには言つてないし！！ ……まだ」

「おいちよつと待て、今まだって言ったな」

「そ、そんなことはどうでもいいんだよ！ 今問題視すべきことは本のことです——」

この本をきつかけに、喧嘩が始まってしまいました。

いえ…喧嘩と表現するのは、何となく違う気がします。少なくとも、私が今まで目にしてきた喧嘩とは。

何故なら、リヴァイさんとハンジさんの『それ』は、どことなく楽しそうにしていますから。

私はそれが不思議で不思議でたまらなく、終わるまで『それ』を見続けていました。

4話

調査兵団の人達は先日、治療を専念してほとんどの人がお休みでしたが、今日からは次の壁外調査に向けて訓練、仕事に励んでいました。

リヴァイさんは立体機動の技術を磨きに、ハンジさんは巨人、ミケさんとエルヴィンさんは戦術について研究をしているらしいです。

私はというと、ハンジさんの部屋で一人、昨日買ってもらった本を読んできました。大きいサイズのの本とは裏腹に文字が大きかった、なんていうこともなく、小さい字でぎつしり書かれていて、絵もなく図もなく一ページ読むのに時間がかかりかかるといふ、私の期待を上回ってくれた本です。

ただし、一つだけ問題点がありました。

昨日あれから寄り道をすることなく兵舎に帰り、リヴァイさんから文字を教えてもらったのですが、覚えきれずまだ読めないところが多々あるのです。

読み飛ばしてもいいのですが、文脈が分からなくなると早く読み終わってしまったら、飽きがきてしまうんですね。

誰かに聞こうにも皆さん仕事が大変そうなので、そうするわけにはいきません。かと

言つて、私のことを全く知らない見知らぬ人では教えてもらえないでしょう。

私のことを知つていて、なおかつ調査兵以外の人……そういえば『あの人』がいましたね。あそこまでの道のりは何となく覚えていたので、多分一人で行けるでしょう。あとはこれを、どうやってリヴアイさん達に伝えるかですね。

ふむ…。

思考を巡らしていると、机の上に置いてある鉛筆が視界に入りました——。

「レイラー、様子見にしたよー」

入つてきたのはハンジさんです。なぜ私の様子を見に来たのかは分かりませんが、何はともあれ早めに伝えることができて良かったです。

私は本のあるページを開き、ハンジさんに見せました。

「うん？ 何か分かんない単語でも——あ、なるほど」

どうやら分かつてもらえたみたいですね。

見せているこのページには、丸で囲まれた文字があります。ついさつき私が鉛筆を使って書きました。そしてそれを繋げると——

「シ、ガ、ン、シ、ナ……もしかしてシガンシナ区に行きたいの？」

「コクツ

「でも私達忙しいからなあ……」

そう言うと思って、私は返事ができるように他のページにも書いておきました。そのページを見せませす。

「……………一人で？」

「コクツ

「……………うーん……」

ハンジさんは目を瞑り、腕を組んで考え込んでいます。

どうしてでしょうか？ 外出するのに許可ができない理由が分かりません。てつきりあらかじめ説明しておけば、出掛けられると思っていたものですから。

もしかして、外に一人で行かせれば、そのままどこかへ行ってしまうと——逃げられると思っているのでしょうか。

でもそれなら、ここに来た初日にこんなことを言うはずですよ。「この家から出るな」と。

それにハンジさんはこう言っていました。「一人で勝手に行動しないこと」——私は勝手に行動してはいけないだけで、事前に伝えてくれれば何をしてもいい、そう解釈していたのですが……違ったのでしょうか？

「……………レイラ、後でリヴァイ達と相談するから、それまで我慢できる？」

ハンジさんは悩んだ末にこの結論に至ったようです。

まさか相談事にまでなるとは思いませんでした。別に絶対に行きたいというわけではないので、行くなど言われれば行きませんよ？ いえまあ、どちらかというところで行きたいので、素直に頷きました。

「コクッ

「じゃ、次は昼ご飯の時間になったら呼びに来るから」

ハンジさんは扉を閉じて、再び仕事に戻りました。

数時間が経ちました。

現在。調査兵団の人達が昼食を食べている食堂で、リヴァイさん、ハンジさん、ミケさん、エルヴィンさんが議論を開始しようとしています。

まずは議論内容について、ハンジさんが静かな声で説明しました。

「……レイラが一人でシガンシナ区に行きたがっている」

その一声に、リヴァイさんとミケさんは眉間にシワを寄せます。エルヴィンさんは飲み物を飲んでいました。

「……なるほどな」

「……一人で……か」

「そう。ミケの言う通り、この話し合いにおいてもっとも難題であるといえるのが——レイラのみで行くということ」

私は参加できないので、分けてもらったスープとパンを食べていました。

スープには少々味がついていますね。パンは相変わらず固くて味がありません。

「目的地は約三キロ、シガンシナ区。壁に向かって進むだけだから迷うことはないとは思う。ここまではね」

「そつから先、つまりはシガンシナ区の中で迷う可能性が高いと……」

「いやリヴァイ、それだけじゃないんだ。帰る時にシガンシナ区を出れたとしても、この調査兵団本部まで無事に帰れるのか——私はそこが一番の肝だと思っている。レイラは道順を覚えていると言っていたけど、たった数回で覚えきれるとは思えない」

そういうえば食堂に来る途中でそんなことを聞かれましたね。私は正直に答えただけですよ。昔そういうのを暗記することが多かったので、記憶慣れしてるんです。

「そうだな。仮に本当だとしても、うろ覚えに近いだろう」

いえミケさん、シガンシナ区までならそこそこ覚えてますよ。と言つても信用してもらえないようですね。

「うん。だから私は、私としては、まだレイラを一人で行かせるべきじゃないと考えている」

「違うなハンジ。行かせるべきだ」

「……理由を聞こうか、リヴァイ」

パンとスープを交互に食べながら思います。このパンの固さを、どうにかして緩和できないものですかね。支障はないはないんですけど……改善できるならしたいです。

ん？ あれは――

「レイラがやりたいと思うことは滅多にない事だろう。この機会を逃すべきじゃない」

「それにしてもリスクが高過ぎる。道に迷ったらどうするの？ レイラは声が出ないから、助けを求めることもできない。行かせない方が賢明だと、私は思うね」

エルヴィンさんがパンをスープに浸けて食べています。見るからに分かります。パンが柔らかくなっています。私もやってみましょう。

「俺もどちらかといえばハンジと同じ意見だな。近くの街ならまだしも、シガンシナ区までとなると……あと二回くらいは俺達の誰かが付いた方がいいんじゃないか？」

「……それでも俺は、行かせてやりたい」

食べやすくなりましたね。今後もこのようにして食べるようにしましょう。スープがない時はそうですね……飲み物にでも浸けましょうか。

「レイラが少しでも望んだことは叶えてやりたい。地図を書いて渡すなり、集合場所を門の近くにして俺達の誰かが迎えに行くなり、何か方法があるはずだ」

「……」

「それに一人で外出できるようになった方が、こいつのためにもなるんじゃないか？
本は買ってやれたが、一冊だけだといつかは限界が来るだろう。いや、もう来ているか
もしれない。あと二回俺達が付いてからだ、先延ばしは一週間以上にもなる。行かせ
るべきだ」

リヴァアイさんが考えを述べ終えると、ハンジさんは若干申し訳なさそうに、
「リヴァアイの気持ちは分かるよ。でも…その方法が分からない」

それに続いてミケさんも、

「方法があつたとしても、安全策でなければ俺は反対だ」

そう言ったつきり、全員口を閉ざして沈黙状態になりました。

えつと…これはつまり、今回はシガンシナ区に行つてはいけない、ということ…です
よね？ あと数回昨日のようにリヴァアイさんやハンジさんと出掛けてから、そうしたら
一人で行つてもいいと。

それにしても、依然として外出許可が下りない理由は分かりませんし、なぜリヴァイ
さんがそうまでして私の望みを叶えようとしたのか、疑問が出てきましたね。

まあ、そんなことは知ったところで何もありませんけど。

さて、残りのスープを飲んで、本の続きでも読みましょうか。読めないところについ

ては、じっくりハンジさんにも教えてもらいましょう。

私は自分の考えに則り、スープを飲み干そうとスプーンで口に運んでいました。

するとポツリ、沈黙の中でエルヴィンさんが言います。

『調査兵団本部への行き方を教えて下さい』と書いた紙を渡しておけばいいんじゃないか？』

聴き逃してしまいそうなその一言に、一瞬だけ無言になり、

「それだ!!」

重く暗かった雰囲気は、ハンジさんの声でかき消されました。

「それだよエルヴィン! それなら道に迷っても助けを呼べる! この策なら安全でしょ? ミケ」

「ああ、俺が反対する理由はない」

「よかったね、レイラ。外に行ってもいいってさ」

え? いいんですか?

私は念のため、リヴァイさんに視線を向けます。反対なんかされていませんし、逆に賛成してくれていましたが、もしかしたらと思ひ、視線を向けます。

リヴァイさんはほっとしたようにして、私にこんな言葉を掛けました。

「行ってこい」

その後私とハンジさんで部屋に戻り、出掛ける準備をしました。

服は白と緑、どちらかのワンピースのうち、白い方のワンピースに着替ええます。

本とハンジさんから渡された紙を持ち、兵舎の玄関まで来ました。

「もし迷子になったら、その紙を駐屯兵に渡してね。いつてらっしゃい」

「コクッ」

ハンジさん達に見送られ、シガンシナ区へと足を運びます。

多少迷いそうになりましたが、シガンシナ区に到着しました。来る途中で道順を完璧に頭の中に入れたので、帰りは大丈夫そうですね。

では当初の予定通り、『あの人』に——数日前までお世話になっていた医者の人に、文字を教えてもらいに行きましよう。

まずはこの門からリヴァイさんと初めて会った大通りに、そこから道沿いを遡れば、きつと病院に着くはずですよ。

一回しか通ってないのと、期間が空いてしまっているので記憶は曖昧になっていますが、歩いている内に思い出せることを祈りましよう。

私は周りの建物を見ながら、曖昧な記憶を頼りに進みます。

なんというか……当たり前のことなんですけど、馬の上から見た高い視点と、いつも通

りの低い視点とでは変わりますね。

初めはそのせいで大通りに着かないかもしれない、なんて思いましたけど、あの時珍しい体験だと思つて、光景を目に焼き付けるようにして見ていて正解でした。斜め上を見れば過去の光景と合うので、何とか辿り着けそうです。

そうしているうちに、目的地の過程である大通りに来ました。

恐らくここ…ですよ？ あの日より混雑してないので、全然違う場所に見えますが、ここ…なのでしょう、そういうことにしましょう。

次に、医者の人とどの通りから来たのか…これは消去法で潰していくのかなさそうですね。一つ一つ見ていきましよう。

私は近いところから順に、通りを見て回ろうと、まずはこの道から見てもようと、体を半回転させた——その時です。

後ろから肩をつつかれ、こんなことを言われました。

「レイラ」

私はびつくりして振り向きしました。

声を掛けられて驚いたというのは勿論そうなのですが、私の名前を知っているのも確かに驚きではあるんですが、何よりも驚いたのはそんな事ではなく——誰の声か分かったからなんです。

覚えのあるとかそういうレベルではなく、間違いなく当たっていると自信を持って言えるほど、声の主が分かったんです。

その声の主に驚きを感じたんです。

もしも声を出すことができたら、思わず「え？」と言っていたことでしょう。

その正体とは――

「やあ、一週間ぶりだね」

医者の人から死んだと聞かされていた、かつて私を監禁していた人物――フェリユさんでした。

5 話

「いやーいきなりいなくなつたもんだから、ほんとこの一週間寂しかったー。でもこうして会えて嬉しいよ」

フェリユさんはニコニコしながら話します。

え……と……？ いや、なんでフェリユさんが生きてるんですか？ 医者の人が家族全員皆殺しにされたとか、憲兵が家を襲撃したとか言っていた気が……。さすがに聞き違いじゃありませんよね？

フェリユさんだけたまたま生き延びることができた……は、偶然にしては出来すぎていますし……憲兵がそんなミスをするでしょうか。

……おや？ 今気付きましたが、フェリユさんの服装がいつも着ていたのと違いますね。前までの派手さがなくなつて、何だかしよぼくなつてます。

なんといいいますか……周りと溶け込めるような、そんな服装になつています。

「信じられないって顔してるね……まあそれもそつか。うーんなんて言えばいいかな……レイラはさ、僕の家に初めて来た日のこと覚えてる？」

フェリユさんの家……ですか？ 何となくですけど……暗い部屋に連れてかれて、手足に

鎖を巻かれて、傷をつけられて…そんな感じだった気がします。

「コクッ

「じゃあその時、僕がこんなことを言ったのを覚えてるかな？ 僕は——」

……あつ……。

『僕は不思議な力を持っているんだ』

思い出しました。あの日以降それらしい事を言っていなかったのですっかり忘れていましたが、そんなことを言つてその不思議な力を見せてくれましたね。

確かにあんなことができるなら、私が知らない何かしらの力を使つて生きていてもおかしくないです。

「納得した？」

「コクッ

それに対し、フェリユさんは「よかった」と胸をなでおろして私にこんな質問をしました。

「ところで見た感じ一人で歩いてみたいけど、どこに行くの？」

医者の人に字を教えてもらいに病院に行くんです、とどうやって説明しましょうか…。さつきみたいに本の中にある字を一文字ずつ探していると大変ですし、そう簡単に見つからないんですよね…。

とりあえず、本を開いて分からない文字に指をさし、教えて欲しいという意味を示しましょう。

「……へー、こういう内容なんだ。いかにもレイラが好みそう……じゃないな、表現が違った。いかにもレイラが選びそうな内容だね」

え？ そうなんですか？ 私は適当に、一番厚そうな本を選んだだけです。それに掃除に関してはあまり興味ありません。

「つてか、レイラつて字読めないよね？ ああでも孤児院の先生にでも学ばせてもらえるだろうから問題ないのか」

違いますよ。リヴァアイさんに教えてもらったんです。

どうやらフェリユさんは病院に住んでいるのだと勘違いしているようですね。まあ無理ありませんが。

誤解は解いておきたいです。私は病院ではなく、調査兵団本部で暮らしていると伝えるため、首を振って否定し持っていた紙を渡します。

「違うの？ ……え？ は？ ちよ、ちよつと待つて。本当？」

あからさまに動揺し、フェリユさんは自分の目を擦つてもう一度紙をマジマジと見て「うわ……ガチだ」と言います。

「……これって調査兵団本部に住んでるって意味だよな？」

「コクツ

「……どんな経緯があればそんな場所に住むことになるんだよ……」

フェリユさんの気持ち、分かります。本当に、なぜリヴァイさんは私を引き取りたいなどと提案したのでしょうか。

『リヴァイが赤の他人を助ける』

私を助けるため……？ でも、私に助けられる要素なんてないですから、もつと別の理由だと思えます。見当はつきませんが。

「あー話を戻すけど、どこに行くのかわかって問いにレイラは本を開いて見せたってことは、文字が分からないから学びに行こうとした——で、合ってる？」

「コクツ

正確に言えば分からない文字があったから学びに行こうとした、なんですけど、読めると言っても半分以下なので間違いではありませんね。

「学びに行こうとした場所っていうのは、多分だけど元々住んでた孤児院だよね？ それ以外に接点のある場所ないし」

「コクツ

フェリユさんから状況説明を問われた時、上手く伝えられるか不安でしたが、ちゃんと伝わったみたいで良かったです。

「……あのさ、もしよかったらだけど、字、僕が教えようか？ 他に約束事とかがなければだけど」

用事は字について以外ありませんね。それによくよく考えてみれば医者の人が病院に居て暇であるとは限りませんし…フェリユさんに教えてもらいましょう。

「コクッ

「じゃああそこに座ろっか」

フェリユさんが指名した近くの川辺の階段に座り、分からない文字を出てきた順から教えてもらいました。

教え方はリヴァイさんより上手で、その証拠に覚えられた字は増えていきます。しかし、なかなか全部覚えきれないものですね。なるべく早く覚えて、迷惑をかけないようにしたいのですが。

「ねえレイラ、少し休憩しない？」

二時間ほど経ってからでしょうか。フェリユさんがそんな話を持ちかけます。

私としてはまだ勉強していたのですが、あくまでも私は教えてもらっている立場です。なのでフェリユさんが休憩したいというのであれば、私はそれに従いますよ。

「コクッ

私がフェリユさんの意見に同意したのを確認すると、

「ならせつかくだし、あっちの方ををぶらつこうよ」

フェリユさんが指をさしている方向は、通ってきた大通りとは反対方向でした。

フェリユさんに先導してもらおう形が進みます。こちらの方の大通りは、店の数が少なくなっていて、全体的にひとけが減っていました。先程まで賑わっていた音も小さくなっています。どうしてでしょうか。

「レイラと会ったあの通りって、この街の中では結構栄えてる部類に入るんだよ。多分街の中心部にあるから。だから中心から離れると、こんな感じで人通りが少なくなる——あくまでも僕の予想だけだね」

歩きながら、私が何も訊かずとも、フェリユさんは解説してくれました。

フェリユさんの説が正しければ、昨日出掛けた時にうろついた場所はシガンシナ区の真ん中辺り、ということになりますね。あそこはとても賑わっていましたから。

「レイラはさ、こういう人通りの少ない通りって好き？」

どちらかというときですね。

理由としてはああいう風に賑やかな場所が苦手だから、こっちのより静かな場所の方がマシというものです。

付け加えて言いますと、私は街の明るさに慣れていないか慣れていないか関わり無く、

あそこが苦手なのです。

私には適応できない場所だから。

適応したくない場所だから。

そして——何も感じる事ができないから。

私はあそこが苦手——いつそのこと嫌いと言つてもいいでしょう。

「コクツ

「……ねえ」

私の返答を横目で見ていたフェリユさんは、足を止めて私を見据えます。

私の眼を——見据えて言います。

「それって、本当?」

極めて真剣な眼差しです。私が嘘をついていないか、ほんの僅かな挙動をも見逃さなような——そんな眼をしています。

フェリユさんはなぜそんな目で見るのでしょうか。私が嘘をつかないことくらい、知っていると思つたのですが。どれくらいの期間かは定かではありませんが一緒に暮らしていましたし、私はフェリユさんに嘘をついたことはありません。

少し気にかかりますが、それをフェリユさんに訊くことはできませんし、仮にできたとしても今はフェリユさんの質問に答えるのが先です。

私は本当です、と首を動かそうとしたのですが、フェリユさんは遮り続けます——なんだかこれだと、はいかいいえか曖昧な内に遮られたみたいですね。いえまあ、本当にそうかもしれないませんが、私の感覚では——えーと。

あ、例えばの話、私が声を捨てていかなかったとします。そんな前提だとすると、こんな感じになるのです。

私は「本当で——」と、そう言いかけたのですが、フェリユさんは遮り続けます——と。

「夜になれば、ここはあの街とそう変わらないだろう」

君はそれでも、こういう所が好きだって言える？ と、フェリユさんは私に念押しします。

夜になればあの街に似る。確かに改めて周囲を見渡してみれば、フェリユさんの言う通りです。

建物や道の分かれ方が似ています。夜になれば背景が暗くなり、人の数がさらに減って——あとは治安が悪くなれば、あの街にあってもおかしくない通りになりますね。

……さつきはマシだから好ましい、そんな理由で肯定しましたが、違いました。私は、どちらかというところ好き、というわけではありません。

「コクッ」

普通に好きです。

あの街に似ているから。

だから私は、こういう所が好きなんです。

「……そっか」

フェリユさんの漏らしたその一言には、微かに落胆した気持ちが入められているように聞こえました。

ですがすぐに切り替わり、そのような雰囲気は一切出すことなく、フェリユさんは私の手を取り歩きだします。

「実は見せたいものがあったて、ここに連れて来たんだ。こっちだよ」

見せたいもの？　どんなものなのか想像ができません。休憩がてらにぶらつきたい

——そんな建前を使ってまで見せたいものとは、一体何でしょうか。

私はフェリユさんに引かれていてる手に進む方向を委ねました。フェリユさんは路地に入ります。

ひとけは完全になくなり暗さが増して、無音の中私達の足音だけが響いているので、いかにも犯罪が行われそうな空気が漂っていました。

あれからフェリユさんは口を閉じてしまい、背中しか見えないので、今どんな気持ちなのか分かりません。しかし、嬉しそうではないことだけは分かりました。

……？ 五分くらいでしょうか。それくらい歩いていると、いきなりフェリユさんは立ち止まります。どうかしましたか？

「……」

私の疑問に、フェリユさんは答えません。口を閉じたままです。

何があつたのか気になつた私は、自分の目で確認することにしました。フェリユさんの隣に移動します。

そこには、私とフェリユさんの目の前には、一匹の黒い猫がぐったりと倒れていました——まるで死んでいるかのように、目を閉じています。

まあここは路地ですし、衰弱している生き物、もしくは死体があつてもそこまで珍しいことではないでしょう。なので私は不思議に思います。

なぜフェリユさんは微動だにしないのでしょうか。猫が邪魔なら避けて進めばいいだけなのに。表情を伺おうにも、何しろ周りが暗いのでどのような表情なのかは区別できません。シルエットになつてます。

「……レイラ」

いつも通りのトーンで、フェリユさんは私を呼びました。

てつきり意外とフェリユさんは猫好きで、この黒猫が可哀想で哀れんでいたから硬直していたと思つていたのですが、どうやら違うようですね。もしも哀れんでいたなら、

ここで私の名前なんて呼ばずに猫を拾い上げるでしょうし。

「この猫はまだ死んでない。けれどこのまま放っておいたら死ぬだろう。僕はこの猫を助けても助けなくてもどちらでもいいよ」

私の予想通り、フェリユさんは哀れんでないどころか、猫に対しての関心もないようです。

「だからレイラが助けたいと言うなら、この猫はレイラが助けたことになる——レイラ、君は猫を『助けたい』かい？」

………あ、そっか。

対象は別に、動物でもいいんだ。

私には動物の感情なんて分かんない。

この仕草をしてたら喜んでるとか、この仕草をしてたら悲しんでるとか、分かんない。声も特定の鳴き声しか発しない。

だったら、助ける相手は動物でも——猫でもいい。

助けたい。早く助けたい。今すぐ助けたい——でももし、この子が助けられることを望んでいなかったとしたら——

「……きつとこの猫は、助けてくれた人に感謝するよ」

……なら、ならもう、迷うことなんてない——迷うことなんてありませんね。

助けたいです。フェリユさん、お願いです。この猫を助けてください。

「コクッ

「……」

私の頷きを見たフェリユさんは、無言でその場にしゃがみ込み猫を触ります。そして数十秒後、猫を抱きかかえて立ち上がりました。

「とりあえず延命はさせたけど、お腹空かせてるみたいだから、食べ物あげないとまたさつきみたいになると思う。だから屋台で何か食べれそうなものを買いにいこうか」

「コクッ

私達は急いで路地から出て、たまたま近くにあつた魚屋さんでフェリユさんに魚を買ってもらい、ゆつくり食事ができる場所——先程まで勉強をしていた川辺の階段で食べさせていました。

黒猫は私の膝の上に座り、すごい速さで頬張っています。相当お腹が空いていたのでしよう。それにすぐく美味しそうに食べています。魚が好きなのでしょう。喜んでもらえて良かったです。

食べ終わると、黒猫は眠ってしまいました。その寝顔はとても幸せそうです。あそこで私が助けなければ、こんな顔をすることなく最期を迎えていたでしょう。本当に、助けられて良かったです。

「嬉しい?」

「コクッ

はい。嬉しいです。

最近ほつきり空いていた心の穴も満たされました。

「そっか、良かった……ところでさ、夕方に差し掛かってる頃だし、そろそろ調査兵団本部に帰った方がいいんじゃない?」

あ、そういえばハンジさんから暗くなる前に帰つてと言われてるんです。

……猫を持って帰つたとしても、飼つていい許可は出ないですよね……。仮に出たとしても、お世話の仕方が分かりません……。もうちよつとこの幸せを噛み締めたかったのですが……。

「僕がその猫を預かってようか?」

え、いいんですか? ではお言葉に甘えて……お願いします。

「コクッ

「了解。会いたくなつたらまたシガンシナ区に来なよ。いつでもこの川辺で待つてるから」

「コクッ

分かりました。明日の昼ぐらいに再び来ます。

それから私は本と紙を持ち、フェリユさんと猫にお別れしました。帰る道順は覚えられていたので、特に迷子になることなくシガンシナ区を出て、私の家——調査兵団本部へと一直線に向かいます。

ここからは迷子にならないでしょう。結局ハンジさんに書いてもらったこの紙は使いませんでしたね。別の意味で役には立ちましたが。

今日、フェリユさんに会えて良かったです。字を教えてもらえましたし、猫を助けることができました。

……あれ？ そういえば、路地に入る前にフェリユが何か言っていた気が……そもそも何で路地に入ったんですっけ？

……ん？ 一時間前の記憶なのに忘れるなんて、おかしいこともあるもんですね。